

# 「あしたのわたし」の「したのわあたし」的レシピ

= 附属幼稚園園歌はいかにして作られたか =

町田 育弥

## はじめに

本稿は、平成30年度に行われた上田女子短期大学附属幼稚園の園歌制作についての記録である。

- 1) 「園歌」制作が企画された経緯。
- 2) 歌詞または歌詞の素材となる言葉を公募したこと。
- 3) 集まった素材をもとに学内の教員に作成を依頼し「歌」として完成したこと。
- 4) 応募して下さった方々への謝意。
- 5) 完成した歌の楽譜。

普通に考えれば、上記1)～4)が簡潔に述べられ、5)が並載されれば報告書としては充分であろう。ところが本稿の主部はそれら以外の記述であり、その内容は、歌詞の構成および作曲を行った筆者の創作行為における思考過程と方法論である。

なぜそんなことを長々と書くのか？

実は、できあがった歌には公募にお寄せ頂いた文や句がそのまま使われている部分がほとんどなく(単語は若干ある)、それゆえに応募者の方をがっかりさせたり、「公募の意味を理解せず町田が勝手に作ったのではないか？」といった疑義が学園関係者諸氏から起る、といった事態を避けたいと考えたからである。

以上の理由から、「お寄せくださった様々な思いやメッセージ全てを私はこのように受けとめ、歌にまとめさせて頂きました」との謝意をこめて、創作の過程を詳細に説明することにした。

これは言わば、食材の原形をとどめない料理を作ってしまった料理人が食材提供者に頭を掻きかき開陳するレシピのようなもの(安心してください。はいってますよ)か、あるいは創作という営みをめぐる一種の物語か、ことによると歌曲作曲法の秘伝書かも知れない。いずれにせよ、この所報の投稿種別である「学術論文」「報告」「研究ノート」などのどれにも該当しそうにないことだけは確かである。

## 当初の経緯

「園歌」制作が企画され、制作手順が決まり、筆者が実質的にその作成の任を負うに至った経緯、公募の内容は、以下に引用する水野美恵園長による主旨説明および同時に発表された募集要項(平成30年5月)の通りである。

### 【主旨説明】

幼稚園には40年間「園歌」がなく、式典に歌えないことを残念に感じておりました。そこで、今年度、新園舎完成の記念に園歌も作成できたらと考えました。今までも出来る限り教職員や保護者と一緒に園を作っていくと考えてきましたので、園歌作成に関しても園児や保護者、教職員、短大教職員、広く地域の方から言葉を公募したいと考えました。～中略～理事長先生から町田先生にお願いしたらどうかというご提案がありましたので、私も、作曲家でありピアニストであられる町田先生、しかも新園舎完成のタイミングで幼児教育学科長をされている先生にお願いすることは妥当であると考えました。～後略～

### 【応募要項より】

～前略～本園の教育目標、環境、園児の生活や遊び、思い、発展などを表現し、園児・卒園生・保護者・教職員等に永く愛され歌い続けられるような、親しみがあり、覚えやすい歌詞を募集させていただきます。～中略～イメージした言葉、地名、幼稚園でのエピソード、思い出、お子さんのつぶやき、保護者の思い等、1フレーズだけでも結構です。

ここには書かれていないが、この段階では、寄せられた素材をもとに、国語学者であり方言研究の第一人者である本学総合文化学科の大橋敦夫教授が「歌詞」を作り、それに筆者が作曲する、という手順が想定されていた。しかし、これについては筆者から「歌詞作成と作曲の両方を自身に任せて欲しい」旨を水野園長、大橋教授双方に申し入れ、了承して頂いた。ひとつには、寄せられた言葉全てを生そのまま直接受けとめたい思いがあり、また、予め「歌詞」として整えられたものを前提に付曲する困難さ(とても苦手なのだ)を恐れたからでもある。

大橋教授は格調高くまとめられた素晴らしい歌詞を書いて下さるだろう。そしてそれは「園歌」という性格上、有節歌曲(共通のシラブル数による複数の「連」が同じ旋

律で歌われる)の形式を前提としたものとなるだろう。その場合、細部のイントネーションや、文意とフレーズまたは和声との整合性など、作曲上の都合によって部分的に変更をお願いせざるを得ない箇所が出て来る可能性が予測された。それは大橋教授に対して、またその歌詞に対しても申し訳なく、もしも変更不可となった場合、筆者の能力では音楽的に何がしかの妥協や我慢を内包した旋律に甘んじなければならなくなる恐れがあるのだ。

園歌は、言葉と旋律が無理なく自然に、美しく結びついたものにしたい。そのため筆者は、両方が一体不可分の状態で同時に、はじめから「歌」として立ち現れて来る状況に身を置くことを望んだ。つまりこれは単なる我儘であったが、そうさせて頂けたおかげで、創作作業は非常にスムーズにストレスなく行うことができた。唐突で身勝手な申し出に異議を唱えず、すんなりと受け入れてくださった水野園長、大橋教授の寛大さに感謝したい。

## 公募の結果

歌詞素材の公募は平成30年5月から7月にかけて行われ、7月下旬に全26編が筆者の許に届いた。在園児・卒園児のご家庭で親子や兄弟姉妹一緒に考えてくださったと思しきもの、また、園との直接のつながりはないと思われる県外の方からの応募もあり、応募用紙に記されたお名前数は50に及ぶ。

内容はとしては、いわゆる「歌詞」の体裁をなす6編の他、歌詞の断片と思しき七五調のフレーズを数行記したもの、園へのメッセージ、お子さんの言葉をそのまま書き取ったもの、「○○な××」のように園のイメージを表す短文、単語の羅列など様々であった。その多様さは、応募要項に書かれた水野園長の呼びかけがそのまま反映されたことを示しており、その点において第一段階は成功であったと言えよう。

## 創作方針－1

前記の結果をもとに創作方針を固める。

まず、お寄せ頂いたたくさんの方の言葉から共通のイメージで括られそうなものをいくつかにグループ化した上で、歌のおおよその像を描き出すことにした。

グループ化の結果は以下のとおり。

グループ① 裏山をはじめとする、園を取り巻く自然環境への愛着、環境との関わり

「裏山」「(緑の)お山」「お山のぼり」「青空」「お日様」「葉っぱ」「原っぱ」「木」「やまんばの木」「どんぐり」「どんぐり拾い」「森」「虫さがし」「お山の幼稚園」「裏山探検(隊)」「お山で遊ぶ」「森の中にいるような」「木の根にできたうろの中に泥だんごを隠す」「四季を感じる」「季節ごとの遊び」「豊かな自然に包まれて」etc.

#### グループ②「この幼稚園が好き」という気持ち

「だいすき～♡」「だいすきたのしいようちえん」「だいすきふぞくようちえん」「気持ちのいい場所」「いつまでも親しみのある場所」「素敵な幼稚園」「巣立った誰もがまた来たくなる素敵な場所」etc.

#### グループ③子どもの笑顔

「笑顔いっぱい」「いっしょに笑おう」「にこにこ笑顔の」「笑顔があるよ」「にっこり花咲く」「子どもの笑顔はじける」「みんなの響く笑い声」「ニコニコ手を振る」「みんなの笑顔・わらい声」「うれしいおかお」etc.

#### グループ④友達とのつながり

「ともだちたくさんたのしいな」「たくさんのお友だち」「みんなお友達」「みんなで○○○」「ずっと仲良し(つながって)」「みんなのでつないで」「たすけあうころこひとつに」「なかよしこよしの友だちだ」「えがおいっぱいおともだち」「なかよくあそぼう」「手と手つなげば心もつながる」「いっしょに○○○」「みんなわになり」etc.

#### グループ⑤園の教育方針・保育者への思い

「自分で考え自分で行動する力」「なぜ? どうして? やってみようという気持ちを大切にする」「こどもたちの「やりたい」という気持ちを伸ばしてくれる」「いろんなことに興味を持つ時期にいろんなことに触れ合うことができる」「やさしい先生」「○○せんせいも××せんせいもだいすき♡」「やさしさに包まれ」etc.

#### グループ⑥その他の気になる言葉など

他に気になる言葉として「夢」「羽ばたく」「つくる」や、歌詞としてそのまま使うことはできないながらも「地域との関わりや伝統行事」があった。また、投稿を眺めるうちに自身の頭に浮かんだ「見つめる」も選択肢に含めることとした。これは集中して一心不乱に何かを凝視する子どもの姿の気高さへのオマージュである。さらに、水野園長との関わりの中でよく話題になる「五感を通した体験的学び」の大切さを表現できる言葉も探してみようと考えた。

以上①～⑥をまとめ、歌の内容および性格を次のようなものとする。

～豊かな自然環境に包まれ、好奇心や探求心を原動力に笑顔で生き生きと遊び、友と語り、時に協働しながら日々成長していく子どもたちと、それを優しく見守り導いていく保育者のいる幼稚園を、「ここが大好き！」という思いをこめて歌える歌～

## 創作方針－２

目指すべき歌のありようが決まったところで、次に「やらないこと」を決める。

まず、「歌詞」の体裁をとるものに直接作曲しない。理由のひとつは既述の通り。さらにもうひとつ。これはコンペティションではないので特定の一編を選ぶわけにはいかない。そうすることは園長が呼びかけた公募の趣旨にも反するだろう。ただし、解体して「語」のレベルで使う余地は残す。

また、特定の遊具や設備、特定のゲームや遊び、特定の活動や行事名、クラス名など、固有名詞に類する言葉は使わないこととした。例としては「キリンのすべり台」「ひこうきジム」「雲梯」「木の園舎」「青い園バス」「ウサギ当番」「お茶の会」「スパイごっこ」「ばら組」「すみれさん」などである。遊具もバスも園舎も老朽化すれば撤去され、買い替えられ、建て直される。筆者が深く関わっている幼稚園の亀は去年死んでいなくなった。「我が学び舎の薨かな」という校歌を持つその学校に、瓦葺きの校舎はもう無い。子どもの遊びには流行り廃りがあり、ある世代で大流行した「〇〇ごっこ」が数年後には忘れられ「××ごっこ」にとって代わられる、といったことはよく起こる。園児数の増減や受け入れ対象年齢の変化によってクラス編成やその名称が変わることもないとは言えない。永年にわたって歌い継がれることを想定し、そう望むならば、特定の時期の園の様子を具体的に示すことは避けたいと考えたのだ。

園長の呼びかけに「地名」があり、その類として「塩田平」「千曲川」「産川」を書いてくださった方もあった。また、園にゆかりの深い伝承に関わる「やまばの木」は多くの方から寄せられており、それは園歌にとっても相応しいと思われた。しかし、これら固有名詞はやはりそのままは用いず、別の方法で生かすことを考える。

園の正式名称である「上田女子短期大学附属幼稚園」これも使わない。固有名詞であるが、使わない理由としてはそのことよりも、音声的に堅苦しいからである。また、「ウエダジョシタンキダイガクフゾクヨウチエン」と歌うだけで数小節を要することは明らかで、子どもが歌うにふさわしい全体の適度な長さ(短さ)に占める割合を考えると非常にもったいない。略称や一部分のみの使用(「タンダイフゾク」「フゾク」など)も、歌の美しさに何ら寄与するものではない。「ヨウチエン」で充分であろう。語

感の固さという理由から、「自然」「元気」「成長」「体験」「未来」「行動」「生活」「感動」などの熟語もなるべく使わず、可能な限り別の言葉遣いでそれらを表現したい(最終的に「未来」は用いることになったが)。

その他、第三者的視点から子どもを評価するような言葉や言い回し(実際に例があったわけではないが、例えば「すなおに伸びゆく強い子よい子」などの類い)は避ける。つまり、子どもに大人目線からの形容語をつけないということ。子どもが歌うことを考えると、そういった歌詞には強い違和感を覚える。子どもが自分の視点から歌える歌とし、子どもの姿は形容によってではなく、行間から香るように描きたい。

### 着手に向けて

言葉と旋律が一体不可分の状態で同時に「歌」として立ち現れて来る状況を作るために、寄せられた言葉のすべてを頭に叩き込んでシャッフルし、「歌」が自身の中で醸成されるのを待つ。

様々な歌詞素材が書かれた応募用紙をときどき眺めるだけ、のまま夏が終わり、秋が過ぎた。水野園長の話では、2月中旬に行われる「やまんばん劇場」(園児の舞台発表会)のときにお披露目できれば...ということであったので、1月下旬の後期授業終講後、1月中旬どこかのある日に作ればよいと考えているうちに12月も半ばを過ぎた。そろそろ1月20日の「新春コンサート」(短大生や卒業生の独奏・独唱、その他アンサンブルや合唱による演奏会)のプログラム原稿を仕上げなければならない。その作業を進めるうちにふと思いついた。～ここでお披露目してはどうか?～

「新春コンサート」には地域の方が大勢来場され、毎年その機会を楽しみにされている方もおられる。そこで新園舎完成の報告とともに園歌をお披露目することは、附属幼稚園に関心を持って頂く良い機会となろう。また、この日は幼児教育学科1年生が合唱発表で全員会場に居るので、彼女らの歌声で北野講堂を満ちし、そのリードで来場者の方にも一緒に歌って頂くことができる。学生が歌を覚えるために年明けの「音楽表現指導法」の時間を使うことを考えると、1月7日の開講までには完成している必要がある。コンサートのプログラムに楽譜を掲載できるリミットもそのあたり。もう書けるか? 試しに脳内を探ってみると幸い良く熟しているようである。泡も消え、澱も沈んでいる気配。すぐに水野園長に電話をかけ、このお披露目繰り上げ案をお伝えした。結果は快諾。そこで、年内に終えなければならない仕事や身辺雑事などを勘案し、創作作業を正月三賀日に行うことにした。

## 創作工程-1 最終2フレーズ

平成31年元日の午後に着手。すでに頭に入っているたくさんの言葉を反芻するうちに、「だいすきなようちえん」というフレーズがやってきた(譜例-1)。これは最後から二番目のフレーズであり、「だ」が全曲中の最高音であることも直感できる。幼児の可唱範囲がほぼ 譜例-2 程度であることを考えれば、この「だ」は白玉で示したCあたりが妥当であろう。

譜例-1



譜例-2

標準的な可唱音域



すると、これは 譜例-3 のようなEs durの旋律となり、その軌跡は奇しくも園から望む独鈷山の稜線によく似ている(図-1)。それはとても好ましいことに思われた。

譜例-3



図-1 園庭から望む独鈷山



適度な躍動感のある「だいすき」のリズムは、歌全体を支配する主要な律動になるだろう。そして、後続の最終フレーズはすぐにやってきた(譜例-4)。

譜例-4



次の段階で前半部のリズムが変更される

前節「だいすきな」とシンメトリカルな順次上行で浮かびあがり、続く小さな凸型旋律線で穏やかに着地する4小節。終わり方として悪くない。後半の2小節は「メリーさんの羊」と同じだが気にしないことにして、さてここをどう歌う? 「だいすきなようちえん」は、子どもにとってどんなところか? そう考えを展開する。遊んだり笑ったり泣いたりしながら日々成長していく場所。日々成長するとはどういうことか? 毎日新しい自分に出会い、自覚を深め、変容していくこと。「明日の私に会う」はどうか? 試しに歌ってみると「あしたのわ」は順次上行線に無理なく合致する。「わたしに」に合わせるには少しだけリズムを加工すればよく、ここを小さなシンコーペーションとする。次の部分、「会う」の意味を歌えるか? 「あう」ではシラブルが合わない。「出会う」これも無理。「出会う場所」か? シラブルは合うが、なんだかわざとら

しいし、「場所」は熟語で、しかもこの旋律線とはイントネーションが矛盾するので却下。「会えるかな」か？ そうだ、それでいい。会えるかな？ うん、会えるとも（譜例-5）。

譜例-5



あしたの わたしに あえる かな

リズム変更された前半部が「羽ばたき」を想起させる

このようにして最終2フレーズがまず最初に決まった。ついでに二番も作ってしまう。この時点で歌は二番までと決めていた。「だいすきなようちえん」は一・二番共通の歌詞とするべきであろう。さて、二番では最終フレーズをどう歌うか？「あしたのわたしに」の旋律を何度も歌ううちに、その上行旋律とシンコペーションの組み合わせが、応募にあった言葉「羽ばたく」を想起させた。ここに使えないか？「明日に羽ばたく」「羽ばたく私の」駄目。「羽ばたく翼」そうか「翼」か。「私の翼が」は？ いきなり子どもに翼を生やすのはおかしいか？ いや、そんなことはない。子どもには翼がある…。その時、応募にあった「やさしい先生」という言葉を思い出す。「優しい先生」⇒「良い保育者」。良い保育者とは子どもの翼が見える人だ。子どもは自らの翼で羽ばたいて飛ぶ。保育者が飛ばすのではない。良い保育者とは、子どもの翼が汚れていないか、傷ついていないか、ねじれていないか、健やかに育っているか、常に注意深く見守り、翼の手入れを繊細に丁寧に行える人だ。だから、「ぼくのつばさ、みえる？」と問われれば「もちろんだよ」と答えられるはずである。

「わたしのつばさがみえるでしょう？」これでよい（譜例-6）。

譜例-6



わたしの つばさが みえる でしょう

ここにある「つばさ」を歌のタイトルとする

イントネーションも問題なく、最後が問いの形になることで一番の一貫性も生まれる。「だいすきなようちえん」にはそんな素敵な先生が居て、そこで子どもたちは日々「あしたのわたし」に出会いながら育っていく。「あしたのわたし」そのものになり続けるのだ。歌のタイトルを「つばさ」とすることが、この時点で決まった。

## 創作工程-2 「だいすきな〜」に先行するフレーズ

楽曲としてのプロポジションを考えると、「だいすきなようちえん」の前にはその部



分と同じ長さ(4小節)の先行フレーズが必要であると思われた。そこは後半部分のはじめのフレーズとなるだろう。「だいすきなようちえん」が緩やかに大きなうねりを描く包容力のある肯定的な旋律であることから、ここは細かい動きの反復などにより、静かに問いかける(文意においてではない)ような楽句で子どもの動く姿を描きたい。そこで3度音程を成す小さな上行音型(順次進行と跳躍による)を重ね、さらにそれを二回繰り返すことにした。これは「だいすきなようちえん」のフレーズと譜例-7のような関係にあり、問いかけと肯定的な応答、のニュアンスを生み出す。

譜例-7

3度上行の小さな動き (子どもの姿) を..... 大らかで肯定的な応答 (独鈷山の稜線) が抱きとめる

時間と音程拡大 & シンメトリー

A+Bを繰り返す部分では「あんなことやこんなことをする子どもの姿」を歌いたいが、遊具や遊び、活動の名称を使うことは避けたい。それらを包括するシンプルな言葉はないか? ある。ついさっき自分で考えたではないか。「遊んだり笑ったり泣いたり」だ。遊具もごっこも笑顔も一挙にクリアしておまけまでつく。これは一・二番共通でよい。さらに「不思議を探そう」というフレーズ。前掲のグループ⑤からの発想である。「好奇心や探求心を原動力に…」をこれで表現できる。「不思議は友達」でもよさそうだ。「好奇心や探求心を友に…」のニュアンス。これは二番に使う。シラブルに合わせてシンコーペーションとすると、最終フレーズの「わたしに」「つばさが」と同じになり、その対応がなかなかチャヤミングでもある。同型反復なので、コードは例えば  $B^b_7 \rightarrow E^b$  の繰り返しでもいいのだが、一回目には微かな陰影(「泣く」のニュアンス)を、二回目には次へ開いていくエネルギーを与えたい。そこで、コード進行に変化をつけ、 $Fm_7 \rightarrow Gm / Fm_7 \rightarrow B^b_7 \rightarrow E^b_7$  とする。

これで後半部分が出来上がった。その全容は以下のとおりである(譜例-8)。

譜例-8

あそんでわらって ないて ふしぎを ぎが そう だいすき  
な ようちえん あしたの わたしに あえるかな  
わたしの つばさが みえるでしょう

### 創作工程-3 冒頭～前半部分(一番)

続いて前半部。まずここまでで何が不足かを考える。前掲のグループ②③⑤の内容は盛り込めた。残るは①④⑥つまり、自然環境、友達、地域の伝統、五感といったところ。後半に「だいすきな」というピークがあるので、冒頭はボトムから落ち着いて始めよう。たとえばB<sup>b</sup>から、お山、裏山、緑…。すると一気に「お山の声、緑の歌が」まで歌えてしまった。芋づる式に後続フレーズ「きこえてくる、ほらここで」もやってきた。一瞬のことであったが、こういう瞬間のために、5ヶ月あまりの時間が必要だったのである(譜例-9)。

譜例-9

Musical score for Example 9, 'Oyamano Koe'. The score is in G major (one flat) and 3/4 time. It features a melody with lyrics: おやまのこえ みどりのうたが きこえてくる ほらここで。 The score includes chord markings 'C' and 'D' above the staff, and three star symbols (☆) above the final notes of the melody.

梢を渡る風(「かぜはそよそよ」が確かあったはず)、枯葉を踏む音、木の根に躓いた時の「はくっ、という音、どんぐりが落ちる時の「びたっ、という音、鳥の声、蝉しぐれ。四季折々に様々なメッセージを伝えてくれる裏山の「声」や「歌」に耳をすます。どこで? 「ここ」で。「きこえてくる、ほらここで」のフレーズはほとんど無意識に出て来たものだが、「ここ」の一語に様々な意味が込められそうだ。つまり、「気持ちのいい場所」「いつまでも親しみのある場所」「巣立った誰もがまた来なくなる」など、愛着や思い出につながるイメージ。千曲川や産川が流れる塩田平という地であることも「ここ」の属性のひとつである。「ここ」が「ここ」である所以は人によって様々だろう。そして、「君(私)にとってここはどんなところ?」そんな問いを孕んだ「ほら」。これでグループ①はほぼ描けたと言えそうである。

「おやまのこえ」の音組成は、伝承歌や民謡によく見られる五音音階である。別所の雨乞い神事「岳の幟」で子ども達が歌い踊る「ささら踊り」も同じ音組成。以下、その歌の一部を紹介する(譜例-10)。☆の音は「おやまのこえ」の旋律と一致する。

譜例-10

Musical score for Example 10, 'Sasara Odori'. The score is in G major (one flat) and 2/4 time. It features a melody with lyrics: こどもしゅーうの かけたる たすきにはながさーく はーなーも ちらさであそべばこたち ざくざくざくざくエンヤ. The score includes star symbols (☆) above the notes corresponding to the melody of 'Oyamano Koe'.

※ 現地での筆者の聴き取りによる採譜。実際はこれより長2度ほど高い。

この「ささら踊り」は何とも素敵な歌である。雨乞いという生死のかかった切実な祈りの歌詞が「花のように可憐な子ども達よ、その可憐さを失うことなく遊べ遊べ」なのだ(中略部分で「遊べぼこたち」が繰り返される)。そのまま園歌にしたいぐらいだが、そうもいかないのが、「ざくざくざくざくエンヤ」の旋律を前奏に拝借することにした。すると面白いことに、譜例-10の★の三音が「ほらここで」にある三音(譜例-9の★)と一致し、意図的に計画されたかのように見事に呼応するのだ。全く偶然だが、こういうことが起ると非常に嬉しい。音楽の神様に後ろからぼんと肩を叩かれたような気分。「地域との関わりや伝統行事」は思わぬかたちでクリアできた。

ところで、毎年「ささら踊り」を歌い踊るのは塩田地区の小学生である。卒園後、小学校でこの歌を習い、「あれ??」となる子どもも居るにちがいない。その顔が目には浮かび、思わず微笑んだ。

さて、ここから直接「あそんでわらって～」に続けようと考えた。「ここで」からの接続も文脈的に悪くない。しかし、はじめから歌ってみると前半部分がどうしても短すぎる。この質量では「だいすきな」のピークを受け止め切れないのだ。かといって他の要素を持ち込んで引き延ばすと冗漫になり、プロポーションが破綻する。しばし呻吟。…繰り返しか? 試しに歌ってみるといけそうである。ただし「ほらここで」の部分の二回目は、一回目とは違うコード設定とする。これは譜例-8の場合と同様、曲の流れにストーリー性を持たせるための処置である(譜例-11)。

譜例-11

ほらここで - ○ ○ ○ ○ -

一回目 二回目

二回目の歌詞はこの時点では未定

「お山の声・緑の歌が・きこえてくる・ほらここで」の旋律をもう一度歌うとして、さてどんな歌詞にするか。まだ描けていないのはグループ④「友達」や「仲良し」のイメージ。「五感」についてもまだ聴覚しか扱っていない(「緑の」と一言歌っただけで視覚を扱ったとは言い難い)。視覚・触覚・嗅覚・味覚…。見る・触る・嗅ぐ・味わう…。目で、手で…どこかにはまらないか。あった。ここだ。譜例-9のCとDに「目で」と「手で」を置いてみる。逆でも音韻的に問題はないが、ここは順番にこだわる。「見る」から「触る」つまり静から動への推移を描きたいから「見る」が先でよい。凝視する子どもの姿「見つめる」を使えないかと考えていたことはすでに述べた。ここだ。「目で」の前に「見つめる」を置く。「見つめる目で」どうする? 何を見つめる? 虫

か、指先か、人の顔か？ そうだここで「友達」だ。友達と視線を交わして目で話すのだ。子どもは非言語コミュニケーションの達人である。言葉では表せない何かを子ども同士は目で交信しあう。ウサギの悲しみを目で聴くことだってできるし、大人に対しても言葉よりはるかに雄弁に目で訴えてくるのではないか。「見つめる目で何を話そう？」これでよい。「手で」の前後もこの形式で考えてみる。つまり「〇〇する手で何〇〇？」の形。「〇〇する手で何触ろう」で触覚クリア。しかし「さわろう」ではあまりにもベタである。そこで脳内ストックから応募にあった「つくる」と「夢」を引っ張り出して「夢見る手で何つくろう？」にしてみる。「触る」のみならずその手で「作る」「創る」でもよい。何ごとかを自分の手で成すのだ。そしてその体験を通して自分自身を創っていく子どもの姿。できた。譜例-11(二回目)の、夢見がちで少しミステリアスなハーモニーは「？」によく似合う。

一番の前半部分は結局次のようになった(譜例-12)。

譜例-12

おやまのこえ みどりのうたが きこえて  
みつめるめ で なにをは な そう ゆめみる

くて る ほらここので ー  
て で なにつくろう ー

E部分の一回目と二回目のコードの違いについては 譜例-11を参照

#### 創作工程-4 冒頭～前半部分(二番)

二番の前半部分は一番と共通の歌詞構成とする。つまり、はじめに自然環境との関わりを歌い、同じ旋律をもう一回繰り返す際には友達との交流を歌う。一番に用いた「目」と「手」は同じ箇所を用いることにする。

グループ① すなわち自然関連にはまだ手つかずの言葉があるが、「葉っぱ」「原っぱ」「森」などは「緑の歌」に、「虫さがし」「どんぐり拾い」「裏山探検」などは「遊んで」に集約済みと考え、ここでは視線を上に向けてみることにする。「青空」と「お日さま」だ。

ところがそうするより先に、「目」と「手」のある二回目の断片がきこえてきた。「友達」からの連想とグループ④にあった言葉による「繋いだ手で」のフレーズ。それに続けて、協働して成し遂げることや、良い人間関係をつくることを「達成」「獲得」の

ニュアンスをこめて「何掴もう？」と歌う。見つめる視線は身の回りや友達よりもっと先、時空を突き抜けて「未来」(応募にあった語)へ届け、の思いを込め、先行フレーズは「見つめる目に未来が映る」とする。熟語は避ける方針だったので「未来」を使うことはためらわれたが、語感があまり固くなく、また、子どもにとってそれほど馴染みのない言葉というわけでもなからうと考え、入れることにした(譜例-13)。

譜例-13

みつめる め に みらいが うつつ つないだ て で  
 な につ か もう ー

これは二番前半の二回目の歌詞。この時点では一回目の歌詞はまだ決まっていない。

つまりひとつ禁を破ったことになるが、それがこの直後にケガの功名となる。

あともうひといき。一回目に戻って「空」を思う。空、青空、お日さま…。不意に「明るい空」をメロディが連れて来る。それでよい。明るい空、空を見上げる子ども、ジャングルジムのてっぺんで背を伸ばし、顔を上げ、目を細めて…。そう、空を嗅いでいるかのような…。突然ある詩を思い出す。谷川俊太郎の「気球の上がる日」の静謐なラストシーン。街の狂騒をよそに独り「空を嗅いでいる」盲目の少年。嗅ぐのだ、匂いだ、嗅覚だ。Fの旋律で何を嗅ぐのか？自身をとりまく世界の、いや、もっと不思議で巨大な秩序の気配。…「宇宙のにおい」か？「宇宙」は応募に無かった言葉で、しかも熟語である。だが「明るい空、宇宙のにおい」は清澄なイメージで悪くない、旋律にも美しく乗り、捨て難い。「うちゅう」と歌う子どもの唇の形を思う。可愛い。熟語でも「未来」は使ったではないか。迷う。迷った場合はやるに限る。採用(譜例-14)。

譜例-14

あ かる い そ ら う ちゅう の に お い

二番の冒頭となる部分

あと4小節。譜例-13のGとHの旋律を何度も口ずさむ。歌い残したこと、気になっていることはないか？ある。「やまんばの木」だ。附属幼稚園の裏の「唐白山」にあった老木。数年前に切り倒され今は切り株しか残っていない。その物語がある。歌もある。園児たちはそれが大好きである。切り株は朽ちても物語は語り継がれ、歌も歌い継がれるだろう。そうだ「木の言葉」、過去と未来をつなぐメッセージ。Hの一回目は「き

のことば」と歌う。

あと2小節。Gの一回目の歌詞が決まれば完成である。

めまぐるしい連想。青空、宇宙、匂い、宇宙の匂いと何の匂い？土の匂い、土が匂うのは雨の日、しっとり濡れた木肌、やまんばの木、物語、伝承、伝統、雨乞い、雨、雨…。そう、「優しい雨」だ。Gは「やさしいあめ」。それをここに置くと、歌い出しの「あかるいそら」と美しい対比をなすことにも気付いた。雨の日の優しい森の表情や匂いをここで歌おう。塩田平の雨は恵みの雨である。ため池の多さ、龍神伝説、雨乞いの神事がそれを物語る。青いばかりが空ではない。少ない雨をいとおしむ、この地に連綿と伝わる祈りの心もこの6音に託すことにする。

### 仕上げ

はじめから通して何回も歌ってみる。流れは良いか、お寄せ頂いた言葉から掬い残したイメージはないか、不自然な言い回しや歌にくい箇所はないか…。大丈夫そうだ。「味覚」がないのが心残りではあるが…。即興で様々な伴奏パターンを試し、弾き語りしながら、ピアノパートも徐々に固めて行く。

前奏は既述のとおり「ざくざくざくざくエンヤ」の引用。一番と二番の間奏は一番の歌い終わりをなぞって笏(こだま)のように投げ返す4小節の楽想とし、後奏は3小節。ただし、最終シラブルの発音と同時に立ち上がる設計なので、実質4小節と言ってもよい。羽ばたき、飛び去るようなニュアンスを出すため、リディア旋法(主調の主音と第4音が増4度音程となる)を一瞬間かせて舞い上がる楽句とする。

これらの検証とシュミレーションを終え、浄書に入る。伴奏付き完全スコア、学生の練習用ヴォーカル譜、「新春コンサート」プログラム用楽譜、計三種を作る必要があり、作業に手間取ったが、なんとか日付が変わる前に完了。

タイトル「つばさ」は数日後、印刷直前に「あしたのわたし」に変更した。

### おわりに

以上をもって、冒頭に記した「お寄せくださった様々な思いやメッセージ全てを私はこのように受けとめ、歌にまとめさせていただきました」の真意、および、応募にあった文や句が歌の中にそのままの形で現れていない事情をご理解頂ければ幸いである。

本稿を読めば、筆者がいかに独善的、主観的に事を進めたかは一目瞭然であろう。つまりこれは、愚直に不器用に美を切望したが故の確信犯なのだ。その結果、この歌

が事実上筆者の作詞・作曲の体をなしていることも否定しない。しかし、応募用紙に書かれた一語一語がなければ、決してこの歌が「このような」ものになりえなかったことに疑いの余地はない。公募に応じてくださった皆様のお心に、そして筆者を突き動かしてくれた一語一語に感謝したい。すべての謝意は巻末のスコアの中にある。